



## 第2回くらげバンチ作画漫画賞 課題②プロット

田井ノエル

ある王国の教会。結婚式を挙げているのは、幸せそうな王太子と可憐なご令嬢。二人は純白の衣装に身を包み、この世の幸福を嘯みしめながら見つめあっている。

その様子を遠巻きに見ている侯爵令嬢・リリア。そっと祝福の場に背を向ける。

リリア「これでよかったです……。」

リリアは、つぶやきながら目を伏せる。寂しげだが、吹っ切れた表情で歩き去ろうとする。が、その前に立つ人物があった。

リリア「ミラン様？」

ミランが笑顔で手をふる。

ミラン「リリア、迎えにきたよ。」

しかし、リリアは暗い顔を浮かべる。

リリア「私は王太子から婚約破棄された“わけあり、”ですよ。次期公爵のあなたが声をかけるような娘ではありませんよ」

ミラン「僕にとって、君の価値は変わらないよ。」

リリアは戸惑った表情でミランを見つめる。

ミラン「ずっと……幼いころから、君を愛していた。リリア……僕と結婚してくれないか？」

驚きの表情を浮かべるリリア。ミランは優しい顔で、リリアを見つめる。

ミラン（……友人の呪いを解くには王族からの“真実の愛、”が必要だと知ったとき、君は迷わず身を退くと決断した。自ら悪役を演じ、婚約破棄されるよう仕向けて……優しい子だ。昔から）

わざと嫌がらせをするリリアと、婚約破棄される現場の様子を思い出すミラン。

ミラン（だけどね……呪いの情報を君に教えたのは誰かな。そもそも、あの子が呪われたのは――）  
（ミランが暗躍したことがわかる回想。リリアに手紙を書き、魔物を友人にけしかえるなど）

ミランの顔に薄らと黒い笑みが浮かぶ。照れながらうつむくリリアには、気づかれていない。

リリア「私でいいのですか……？」（驚きながらも、嬉しい表情）

ミラン「もちろん。君が……君だけが欲しかったんだ。ずっと、ね。」

ミランの腹の内に気づかぬまま、リリアはその手をとる。